
竜の少年

津田花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の少年

【Zコード】

N5103C

【作者名】

津田花

【あらすじ】

あたしはシーナ！伝説の魔法使いの血を引く者。でも落ちこぼれ。姉様達はもう一人前になつて仕事も持つてるつて言うのに、あたしにできる魔法はたつた一つ…。

一、何なの！？

あたしは子どもが嫌いだ。
うるさいし、すぐ泣くし、生意気だし…。

挙げだしたら切りがない。

そんなあたしが今、目にしているもの。
それは魔物を退治する子ども。

まあ、魔物を倒すことは問題じゃない。

一年間慣れ親しんだ我が家が、突然壁から入ってきた魔物と、引き
続きやつてきた少年によつて半壊しているこの状況が問題。
招待した覚えはない。

あちこちにあいた穴から時々見える魔物と少年。

あたしにとつてはどっちも魔物。

小さな家だけど、結構気に入つてた。
もっと頑丈に作ればよかつた？

「おまえ、もしかして鱗もつてる？」

魔物をやつけたのか、家から出てきた少年。

初め見たときは、透き通るような青い髪に驚いた。

その髪は今やクシャクシャで木くずをつけ、息も衣服も乱している。

そんなにがんばってまで魔物が倒したつたの？

「偉そうに…人の家壊しといて何！？」

まず謝つて！！

あたしの肩にも満たないような背格好でなによ？

「また魔法でも使つて直せばいいだろ？その瞳、魔力を持つ者の瞳

だ。」

確かにあたしの瞳は黄金だ。
でも、それは関係ない！

「あのねえ、いくら魔法で直せても前と同じよつには出来ないのー。
！簡単に言わないで！君、思い入れって知ってる？」

少年はあたしの顔を見て明らかに馬鹿にして笑った。
もう絶対許さない！！

「あんた、あたしをなめてるでしょ？」

腹の底から出た声。

「全然？」

これだから餓鬼はつ！！
なによ！その勝ち誇った顔！！
その時、ようようとあたしの家から這い出た魔物。
何で倒してないの？
でも、さつきより小さい。
…小さい？
何で小さくなるわけ？

「シーナ！無事か？」

突然、地面に無数に転がっている粒の一つ一つが、煙のよつに、あ
たしが一番見たくない人を象る。

「父様！」

この一年連絡なんてしてこなかつたのに。
やつと解放されたと思ったら、やっぱり何か仕掛けてたんだ。
今連絡してくるなんて。

「説明は後だ。返還する。」

結局これだ。

「はい。」

足下に現れたおなじみの魔法陣。

上級者にならないと魔法陣なんて作れない。

その父様の魔法陣が少年の足下にあるとは思ひつかなかつた。

「もつあたしの運命ひうなつてんの！？」

ばかでかい家。

中にはあたしのいた部屋に、姉様や妹のいた部屋。

父様の仕事部屋に母様の占い部屋。

メイドさんの部屋に使つてない部屋。

慌ただしく行き交う人々。

ここにいたのがすぐ前の事みたい。

その懐かしの本家、父様の仕事部屋であたしは衝撃の事実を知る。

「」の少年が伝説の人間？あの昔話のですか？」

どう見ても人間には見えない。

透き通る青い髪に同じ瞳。

色素の薄い肌。

それによく人間はもつと醜いと教えられた。

本人は話の内容をつかめずきよとんとしてるし。

「そうだ。バテバリー・ギ様と戦い、石にされた元人間の竜、君だゼン。」

何で名前知ってるの？

そんな有名な話だったつけ？

「でも五百年も前の話でしょ？」

今更そんな…。

「古き話だが事実だ。」

「俺は五百年も眠っていたのか…。」

暗い横顔…。

五百年も眠つてしまふなんてどんな気持ちだらう?
一晩で世界が変わる。

「ようやく封印が解けたのだ。ゼンと共に鱗を探せ。」

は?

何を突然?

「少年と共に旅をせよと?」

「そうだ。母様の占いに出た。バテバリーギ様も、そう望んでおられる。」

バテバリーギ…か。

「…でも、そもそもはバテバリーギ様と戦おつとした少年が悪いんです。断ります。」

なんであたしがこんな餓鬼と一人旅?
いくらかわいそだだからってそれとこれは話は別。
ちらつと隣を盗み見るとひざまづいていた。
なにしてんの?

「僭越ながら申し上げます。鱗は私にとつて力の結晶。共に探して下さるというお気持ちは有り難いです。ですが、我が身の為に他人の手を借りるなど、もっての他。お断り願います。」

「わっ！」

こんな堅苦しい言葉、どうで覚えたのよ少年？

「せうか。ならば私も願おう。」

「おやじ、ゼンがひざがついたりなんかするから調子に乗ってるよ。」

「我らアコンス家はバテバリーギ様の血に恥じぬよう、十六で一人立ちし、己を磨くのだが、我が娘は自分の住む場所が出来ないよつだ。旅で鍛えてやつてくれ。」

「しかし……」

「行け少年！――

父様をやつける――

「魔物一匹倒すだけでその様子ではこれから大変だ。せめて無傷で倒せるようになるまで娘を側に置いておけば良い。不必要と判断すれば捨ててかまわん。」

やっぱり父様は家の繁栄しか考えてない。

「ですが……」

「足手まといにはなるまい。なあシーナ？」

なによその言い方！

「当たり前です。魔物一匹など大したことではありません。」

本当は魔物と戦つたことないけど…

「それなら詫みよー。」

…しまった…！

乗せられた…。

口のうまこおやじ…

「ゼン、我が家にある鱗を渡さつか。」

「はー。是非。」

そつやつて物で釣る。

はあ。

何でこんな餓鬼と。

三、ともるなあたしーー

「あらがとうございました。また是非私共の宿を『』利用ください。」

いつも豪華な接待だと調子が狂う。

「は、はあ。」

原因はもちろんお金。

父様が旅費として無理矢理少年に渡したお金。
でも実際は養育費だと思つ。

他人の手助けを嫌う彼は、それをこの宿の主人に全部渡してしまつた。

…もつたいない。

あたしでもあれほど高額なお小遣いもらつたことない。

「あ、待つてゼンー！」

突然少年はあたしをおいて駆け出す。

…何か追つてる？

「ゼンーーー！」

何見てるの？

振り返った少年は、ため息の出そうな顔。

「今、鱗の気配がした。」

「え？ そんなの分かるの？」

「強い能力がある鱗ほど分かる。…見失った。」

悔しそう。

「ゼン…」

「何だ？」

「バテバリーギを今でも恨んでる?」

「当たり前だ!…」

少年には似つかわしくないその表情にあたしは恐怖を覚えた。

「…そうだよね。」

そのくらい分かつてる。

あたしも奴が憎い。

あたしから妹を奪つた。

イユを…。

でもゼンは計り知れない量の時間を奪われた。

目覚めれば家族も友達も知り合いも誰一人いない。

「あのや、なんて言えばいいのか分かんないんだけど…」

「めんは変だし、がんばれって何を?」

「えつと…」

言葉が出ない。

「おまえが気に病むな。」

「え？」

さつきとは全く違つ、優しい顔。

でも先祖が悪いことをしたのに見て見ぬ振りはできないし…。

「おまえみたいな魔法も使えないし人間に氣を使つてる奴が、バテバリーギの血を引いてるなんて面白いな。」

少年の無邪気な笑顔。

「なつ！－！何よそれ！」

魔法は使えます！

子どものくせに勝手に決めないでよ。

「ほめたんだよ。」

それはどうかな？

「今回の獲物は、北炉の洞窟の白狐。」

ゼンがポケットから取り出した紙。
小さくてかわいい魔物が描かれてる。

「ほぐりう？」

「北炉。賞金は二万パシー」

「安つ！他のことじよつよ。」

そんなんじゃ生活できない！！

「それ以外に鱗を持つていそな奴はない。」

「それより生活が！！」

「大丈夫だ。行くぞ。」

今まで敵を倒した賞金を合計しても、ぎりぎりの生活なのに。
父様からの教育費だけが頼りだったのに。

「がんばろう。」

四、わいつことな旅に出たから」こんな目に遭うんだわ……。

北の森の北炉の洞窟、暗闇にわずかに差し込む光、小さな体に可愛い顔の魔物。

白い体に三つ叉の長い尾はまるで槍。

「わあっ！」

「うちに来たっ！－！」

「危ない！－！」

他の尾につきまとわれた少年はあたしを助けようと、必死だった。けど遅かった。

あたしの右肩から血がこぼれ落ちた。

「痛っ！」

じわじわと痛みが押し寄せる。

「くそっ！－！」

槍を剣でかわす少年。

この前拾った鎧だらけのやつだ。

あたしも戦いたい。

役立たずは嫌！！

魔族の名門に生まれて魔物に傷を負わされるなんて恥！

無意識にあたしの真ん中に集まる力。初めは微か……そして次第に強くなる。

今だ！！

光れ！

あたしの真ん中から一気に解き放たれる力が体中を輝かせた。

「ギュウウ！」

ただ光るだけで戦闘にはあまり使われないけど目眩ましにはなる。でも…また言葉に頼ってしまった。

ゼンま、動き

ゼンは動きの鈍くなつた魔物小さな体を一突きした
魔物は悲鳴も上げず動きを止めた。

センは一瞬長い尾にめり込んた鰐を弓を繋かした

「バカ！！下がつてろつて言つただろ！？」

ゼンが私の左手を引き光の方へ駆け出した。
本家にあつた鱗のせいか、少年は強くなつた。
でもあたしは今だ解放されず……。
しばらくの間少年と旅して分かつたこと。
少年は大人だ……。

認めたくないけど！！

なんか話し方も落ち着いてるし、妙に色気がある…って言つたらあたしがまるで変態じやない…！
ゼンは外に出るとすぐに自分の服の腕の部分を引きちぎつてあたしの右肩に結びつけた。

「あ、ありがとうございます。」

「もつと周りをよく見ろ。」

なに？そのため息？

「見てたわよ！」

「じゃあ避けれなかつたんだな。」

「いぬわこ。」

確かに今まで足手まといにしかなつてなかつたけど…。奴は捨てゼリふを吐くと取り返した鱗を飲み込んだ。少年の華奢な体が少し光つて見えた。

「やつぱり。これも違つ。」

自分の手のひらを見て、かなりの不満顔。

「何が違うの？」

あんたの鱗でしょ？

「…まだ教えない。」

「なつ！」

何よそれ？

しかもその企みのあるような笑顔は何？
その手には乗らないんだから…！

「別に？ 知りたくないわ？」

「別に？ 知りたくないわ？」

「どうちにしろ教えない。」

楽しそうに、ニヤリと笑った顔。
こんな皮肉な奴見たことない！

「それよりその傷、早くふさがないとな。」

「大丈夫よ。」

そんなに申し訳なさそうにしなくても、ゼンは悪くないのに。

「痛いだろ？」

するりと少年の手があたしの手を掴む。

「い、痛くない！」

：痛いけど。

つていうか、その上目遣いはなしだよーー！

「それに魔族の血は魔物の好物だ。大量に寄つてこられるのは困る。」

「まあね。」

「ん？」

ちよつと、こつまで手つないでいる気?

「近くの医者に行くぞ。」

え?

近くの医者:

ちよつと待つて!!

それは困る!

五、…誰？

強制連行されて、着いた場所はやつぱりそつ。

「あら？ シーナ？ 怪我？」

あたしの一一番年上のシユリス姉様。
ブロンズの胸あたりまでのばした癖のある髪。
綺麗な顔だち。

その姉様の病院兼、家。

ここに辺では一番腕のいい医者。

「なるほどね。母様も何であんたを選んだのか。」

お茶を淹れる姉さん。

腕がいいから怪我は会つて五秒で直つた。

やっぱりシユリス姉様はすごい。

そして久しぶりだからお茶でもいかが、って言われて上がりつてしまつた。

でも、久しぶりすぎて氣まずい。

「あ、アコンス家は代々修行のために鱗を一つずつ借りる事が出来るのよ。」

「それがなに？」

知ってるよ。

「あたしも持つてるわ。」

当たり前じゃん。

鱗は…

「あ、そつか。初めから姉様達を探せば良かったんだ。」

「氣づかなかつたの？」

「つまりシーナの姉妹を探せばいいわけか。」

お茶を優雅に口に運ぶゼン。

「じゃ、取つてくるわ。鱗に付けた封印も取らなきや。」

姉様が立ち上がつた。

「何で氣づかなかつたんだ？ 役立たず。」

「何ですって？」

ゼンめ！ カチンと来た！

「そんなこと言つたらあたしの持つてる鱗あげないんだからねー。」

「まあまあ。痴話喧嘩？」

あたしの後ろを姉さんが通り過ぎ、部屋から出でこつた。

「あたしサポートしたじゃないー。」

「ただ光るだけ。」

「悔しいーー！」

子どものくせにその勝ち誇つた笑いがつ！

しかも魔法を言葉に頼つてしまつたからよけいに反論できないーー！

「役に立たないなら置いていきなさいよー！あたしあんたと連む氣無いから。」

途端に田つきを変えたゼン。

ちょいちょいと一本指であたしを引き寄せる。

「何？」

少年の綺麗な顔。

「そんなもつたいないこと出来るか。」

耳元で囁く。

「…えつ？」

「おまえ、本当に面白い。」

にやりと笑つたゼンの顔が、急に大人に見えて顔が熱くなる。

「俺の鱗はお前が持つてろ。」

「お待たせ。鱗持つてきたよ。」

丁度良く扉が開いた。

「鱗なんか使わなくてね。本家に返しに行く手間が省けてよかつたわ。ありがとう。」

戻つて席に着く。

「やつと出合えた。」

ゼンはそんな」とお構いなしで鱗に夢中だし。

「そんなにこの鱗が?」

手渡された鱗を直ぐに口に運ぶ。

「当たり前だ。」

ゼンの体が光る。

今日は一回目だ。

「ん?」

わつきより明らかに強い光を放つゼン。
光が部屋を闇のように包み込む。

「眩しい……。」

あ、光が消えた……?

「…誰？」

目に見えるのは透き通る青い髪の男性。
鼻立ちの整った顔。
わずかに残る少年の面影。
ゼン？

「お前のその反応が見たかつた。」

五、…誰？（後書き）

あの「…今更なんですが、読んでいただき、ありがとうございます。」

(*^-^*)

あなたのやの田を通じて思つて下さる心が何よりの至福です。m

(ーー)m

六、ああもう…！訳分かんない！

「お前のその反応が見たかった。」

低くて男らしいドキドキするくらい綺麗な声。
笑顔には少年の面影が残る。

あたしより年上の人。

「服が使い物にはならないわね。」

姉様の言つとおり、破れてあちこち裂けてる。
机で下半身が見えないのが救いだわ…。

「しょうがないわね。」

シユリス姉様が口を閉じると一瞬にしてゼンが服をまどつた。

「あたしの男友達の古い服。あげるわ。」

姉様は良い年して男女共にたくさん友達が居るのに独身。
こんなに綺麗なのに結婚できないのはなぜだろう？
つていうか、勝手にあげていいのか？
似合つけど。

白いシャツに黒い綿のパンツという楽な格好なのに、なぜか気品が
漂う。

そしてその髪と瞳の青。

「ゼン？…だよね？」

「ああ。」

「一体いくつなの？」

「二十一歳。」

ヨルス姉様と同じー？

「なんで？」

いきなり…

「シーナ、ゼンはね…」、バテバリーギに変化で竜にされた

自慢げに入さし指を突き立てる姉様。

「一、竜にとつて能力である鱗を奪われた。」

今度は中指も。

「三、石にされたのよ？」

薬指もたててにこやかに笑う。

「知ってるよ。それで石のまま五百年眠ってた。」

それくらい昔教わった。

「そうね。じゃあ、竜が最も得意とする人間の擬態は？」

え？何だっけ？確かに学校で習つたはず…

「あ、”少年”。」

「そう。今までは竜だった。そして今の鱗はゼンの肉体という能力だった。肉体を取り戻して呪いが解けたのね。」

呪いが？じゃああたしは…！

「いや、解けてない。姿は取り戻したが呪いはかけた本人しか消せない。」

「まだ呪いがあるの？」

解放されたと思ったのに。

「鱗だ。呪いが解ければ一気に俺の元へ集結する。それにまだこの状態じや、竜の体と人間の肉体を一つの魂でつなぎ止めていることになる。」

えつと…難しくてよく分かんない。
バテバリーギめ、余計なことを…！

「呪いを解く方法はあるわ。バテバリーギはまだ生きているもの。」

「姉様…！」

まさかイコのこと？

「アコンス家は代々一人をバテバリーギに捧げるの。魂の器として。」

「

「姉様……」

「今はそれが末娘のイユ。シーナの双子の妹。」

「ダメー！」

「でもまだバテバリーギは覚醒前よ。直接話してみると良いわ。」

あたしの反応を無視して淡々と語り続ける姉様。

「バテバリーギ……」

またあの田…

「やめて！イユを傷つけないで……！」

お願いだからこれ以上は……！

「じめんなさいね。シーナはイユの事となると……」

「……」じめん。

いつの間にか涙まで落としてしまっていた。
ゼンはそんな人じやないって分かつてる。

「ゼン、とりあえず鱗がある程度集めてからにしなさい。覚醒前の
イユはかなりやっかいよ。」

「わかった。」

イユはあたしの双子の妹。

10歳でバテバリーギの器になつた。

「とりあえず今日はうちで休みなさい。明日トペシーの家まで飛ばしてあげる。」

移動魔法も使えない落ちこぼれのあたしのせいで、奴に選ばれてしまつた。

七、姉様…そこまで興味なかつたのね。

トピシー姉様はシュリス姉様とは正反対の男たちし一十八歳。
今日もばっちりメイクしてる。

誰かドピシー姉様の素顔を見た人はいるのかな?

姉様は頭の良い何でも屋。

「で? その男は?」

いつものよつに煙草を吹かしてえりせつにソファに横たわる。

「だからバテバリーキに呪われたゼン…」

さつき説明したじやん!!

「それは聞いた。そうじやなくてあんたの男なのかつてこと。」

「違ひ…」

「何でやうなるの!..

「ヤレヤレで否定することないだろ? 僕はお前が好きだ。」

「え? やうと!.. 何普通に言つてんの!..

「あ? やあお口説くのは無駄ね。」

「え? あの…。」

あたしの意見は無視？

つていうかトピシー姉様は、本当に男にしか興味ないの？

「まあ良いわ。本題に入るわよ。」

「鱗はね…」

姉様の言葉でその場にいる全員が固唾を飲む。

「あげちゃった。」

「なつ…！」

「だつて必要ないし。」

確かにシユリス姉様もトピシー姉様もツタ姉様もヨルス姉様も、あたしの姉様達はみんな鱗を必要としないくらい力がある。

大切に鱗を肌身離さず持つてたのはあたしだけ。

効果も何もないけど、持つてれば優しい気持ちになれて安心できた。

「でもあれは…」

「分かつてるわ。」

「うわ、面倒くさいわ。」

「今はビリにある？」

「カフレイ山奥に住む一人暮らしのおばあちゃんよ。依頼されてね。

あげちゃった。」

「カフフレイ山つて……」

確か……。

「飛ばそつか？」

え？

「頼む。」

「でもあそこ急斜面だから帰りは気を付けてね。」

やつぱり。

「大丈夫だ。」

ええつ絶対無理！！

「じゃあ飛ばすわよ。」

あたし移動魔法使えないんだってば！

ハ、違つ違つ……意識なんてしてない！ただひょっと混乱してゐるつつか…

突然目の前に現れた木の群生に一件の山小屋。

「おや？何じや？」

「ここにむかは。」

花の手入れをしていたおばあさんが振り向いた。

「鱗を返してもらいたい。」

「ゼンそれは会つて直ぐ歸つせつぶじやない。」

でも田は真剣だし。

綺麗な瞳。

「はて鱗？…………あーああ、トピシーちゃんのプレゼントかい？あれは孫にやつちましたよ。」

「ええつ？」

またなの？

「わいわいらして綺麗ねつて喜ぶもんだからねえ。」

そつこいながら、花の周りの雑草を引っこ抜く。

「ばあさん、孫はどこのいる？お前は？」

低くなつたゼンの声…

つて…！あんなこと言われたからつて、いかに反応しないの…あ
たし…！

「名前はトウールじやよ。トウールはカフレイ山のふもとの繁華
街に住んどつての。白膚の孫でねえ…あの子は踊り子をやつとるん
じや。ちょっと踊れば人が山のように集まつての、なによつぱしゅ
うてもわしに会いに来よる。ええ子じや。」

孫白膚…。

「トウールね。」

「直ぐに山を降りるだ。」

「ええ？」

今から？

疲れたんだけど。

「あれ？おばあちゃん。お婆さま？」

突然目の前に現れた巻き毛の女の子。

「トウール…！また来てくれたのかい。その人達はお前に用がある
んじやヒ。」

後ろからつれしあうなおばあさんの声。
やつぱり孫か。

「トゥール。」

ゼンのきれいな声が響く。
あたしの名前を呼んでいるわけじゃないのコレキヤキする。

「何ですか？」

可愛らしく顔を横に傾けると染められたピンクの髪が揺らめく。

「お前の鱗をくれ。あれはもともと俺の物だ。」

トゥールに差し出された手は大きくて細長くて男らしく角張った手。

「ただでは譲りませんよ？」

いたずらかに微笑む顔はあたしを不安にさせた。

九、ゼン、ゼン、ゼンって何なのよ？

「ゼーン今日も公演なの……ボディーガードよひじへー」

「ああ。」

腰にさびだらけの剣をさげる。

ゼンは今日もトゥールの護衛。

何でも最近女の子をねらうキス魔がいるらしい、この公演期間の護衛を任かされた。

鱗と引き替えに。

毎日の公演。

しかも朝出るとあたしが眠った頃に帰ってくる。

夜も一人でどこかに出歩いてるみたいでいつも眠そう。

「この衣装で踊るのよ……綺麗でしょう？」

衣装を身にまとったトゥールはそれはそれは綺麗な体。やせて胸も腰もないあたしとふくよかで胸も腰もある彼女。

普通、男ならトゥールを取るよね、絶対。

でもあの二人が並ぶと妙にイライラする。

トゥールはどこから見てもゼンにベタボレだし。

あたしは危ないから出るなって言われて宿にずっと一人だし。

宿はトゥールの顔利きの店で無料だから困らないけど。

ゼンの判断に任せることがないの？

なにがあたしにできることがない？

「シーナ。」

久々に聞く声。

「おはよー。」

延びた手があたしの頬をなでて輪郭を作り出す。
その一瞬の手の動きがあたしを天上へと導く。

「お、おはよー。」

ゼンの柔らかい眼差し。

最近会つてなかつたからどう関わればいいか分からぬ。
心臓が跳ねて目を合わせられない。

「行つてくる。」

その言葉を残して出ていってしまった。
そうだ！

何で気づかなかつたんだろう？

あたしも公演に行けばいいんだ！！

あたしなんて別に誰も狙わないでしょ？

そうだ行こう！！

すぐに公演の会場へ行くゼン達の後を追つた。
後ろ姿を追いかけて、追いかけて追いかけて、追いついたのは小さな噴水のある広場。

「ゼンーーー！」

振り返つたゼンは、あたしをまじまじと見て…怒つてゐる？

「何で來たーー？」

「あたしも行く。」

「ゼン一人で十分よ帰つて。」

なによ?

えらそりにー

「あたしが足手まといだとでも聞こたいの?。」

「わいぶ。」

見下すんじやないわよー。

「何ですか?」

「わかつた。ついてー。」

ほら、あたしだって役に立つんだから。
あれ?

「ゼン?」

動きが止まつた。

「鱗の気配だ。」

「私の?」

肌身離さず鱗を持ち歩いてるあなたの鱗に、ゼンが反応するわけな

いじやない。

まあ、あたしのも違うだろうけど。

「僕のかな？」

「誰？」

今、気配がなかつた。

「魔物か。」

あたしのすぐ隣に立つた人。

赤い髪に赤い瞳。

前のゼンみたいに、あたしの肩にも満たない背格好。

笑顔の青年。

見た目は人でも魔の気が漂う。

「魔物？」

ゼンの横にいたトゥールの顔が白くなつた。

「これでしょ？」

差し出した手の中には…

「ゼンの鱗。」

「返してあげようか？」

笑顔を絶やさない顔からは気持ちが読めない。

「取引か。」

「そ。僕ら人型は人間と戦うには強すぎる。」

赤い瞳がゼンをとらえる。

そして次はトゥール。

「その魔族は魔力なんて無いに等しいし、」

ほら！

トゥールの方が役立たず！
つて、視線が交わつただけで氣絶しそう。
大丈夫かな？

「この魔族は自分の巨大すぎる力を扱いきれてないみたいだし。」

肩にぽんと手を突かれた。

「シーナに触れるな！！」

わっびっくりした。

「だ、大丈夫だつて！」

敵意むき出しつて感じでもないし。
でも、巨大な力？

あたしに？

そんなわけ無い、でたらめ言つてんの？

「だから君の魔力が欲しいな。」

「え？ それだけ？」

魔力なんてすぐに溜まるのに。

「良い条件でしょ？」

それで鱗が集まるなら。

「交渉成立ね。」

「だめだ。」

慌てて、あたしと赤い笑顔の魔物の間にに入るゼン。

「なんで？」

良い条件じゃん？

「こいつがキス魔だ。」

えつ？

何を根拠に？

「よく分かったね。僕、魔力の回復が遅いから。どこから調達しないと。」

暢気な魔物は一人でペラペラ空に向かって話す。

「人型は魔力を口から吸い出す。」

ええつ？

「知らなかつた。」

危つく魔物とキスするとこだつたよ。

「折角だから魔族の女の子とキスして一石二鳥。みたいな感じだよ。

」

まだ喋つてゐる…。

「それで何人が迷惑したと思つてゐるのよ。」

この町の人々にゼンにあたしに一応トゥール！

「ま、魔力がもらえないなら良じよ。今回は回復するまで眠る事にするよ。」

つて、話聞いてないし…！

「あー…ちよつと…」

移動魔法でどこかへ行つてしまつた。

最後まで笑顔。

ああ言う顔なの？

「良かつた。」

ゼン！

「良くないよーー。」

鱗がーー！

「よかつた。」

ガクンと膝を地面に付けて放心。
トゥール、魔物がよっぽどこわかったのね。

「シーナ。」

「え？」

肩が急に重くなつたと思ったら、睡眠不足のゼンの頭があつた。

「ちよつとまつてーー。」

だんだん重く…

「ゼン起きてーー。」

あたしそんなに力持ちじゃないからーー。

つていうか…
近い。

十、余計な事しないでよー！

きれいな顔。

向こうの側が見えそつたほど澄んだ色を見せる髪。
閉じた瞳、筋の通る鼻、薄い頬。

「ゼン。」

名前を呼んでも瞳の色は見えないまま。

「わよっとーーー私のゼンに触らなこでーーー」

「あ。」

『気づいたら無意識にゼンの手を握りしめていた。』

「ゼン」といた時間が長いからって調子に乗らないでよね？」

トウール、第一印象はすぐ良かつたの。今はこいつってえらやうにあたしをじらむ。

「あのわ、あたし別にゼンのこと好きじゃないし。」

挑発には乗らないから。

「何言つてんの？倒れたゼンを見て今にも泣き出しちゃったのは誰？」

「倒れたのはあんたが振り回したからでしょーーー？毎日毎日毎日毎日

「……ゼンがどれだけ疲れたと……」

「そんなに取り乱して、いい加減好きだつて認めたらっ。」

話の途中でつ……

まだあたしには言いたいことがたくさんあつたのに……！

「認めるわよ……。」

あ……。

静寂な時間があたし達を包み込んだ。

「言つたわね。」

「もつこいやー！」

「あたしはゼンが好きよ。」

「おまえ俺が好きなのか？」

「カールよりも……誰よりも好き。」

……？

振り向くと呆気にとられている愛しの人。

「あり~ゼンおまよ。」

何？これは夢？

「おまようつて……カール、おまえが寝たふりしてうつて言つたん

だろ? 「

「は?」

ビバービバービ?

「あは。」

何で満面の笑み?

「何なんだ?」

「だつてあんたたちみててかなりイラライラしてや。特にシーナ。」

今までとせうつて変わつて、トカールはまるで初めてあつたときの
よつなあつやつとした表情。

「おまえ、顔赤い。」

「やつと笑う顔はなんだか勝ち誇つて見えた。

「見ないで!..」

布団に顔をつづこむ。

あー何で言つちやつたの?
全てトウールの思つづぼだわ!..

「ま、あたしの趣味が恋のキューピッドで良かつたわね。」

良くない。

よけいなお世話！
そして変な趣味！

番外、え?……あ、ありがと♪（前書き）

突然ですが、いつも読んで下さって有り難うござります。
(*^-^*)

番外、え？……あ、ありがと。

あるの日宿屋でのこと。

ゼンはあたしを置いて、一人出かけてしまった。
今日はトゥールの公演はないのに。

あたしの部屋に顔を出して、

「ちよつと行つてくる。」

つて……どひー？

天氣もいいしあたしは散歩にでも行こつかな？
あ、そうか。

変な奴がつりついてるから出るなつて言われてたんだ。

「暇だな。」

かといつてトゥールと会話を楽しむことはあたしには出来ないし。
また一日中、宿にあるつまらない本を読む羽目になるのかな？
本棚を見るとそれはそれは魅力のかけらもない背表紙が…

”経営者の心得”

”経済力のすべて”

”宿にかける思い”

”季節の絶品料理”

読みそなのはやつぱり”季節の絶品料理”だけね。

ページを開くと見慣れた「ちそつが並んでいる。

はじめのうちは美味しそうだっただけど何度も見ると飽きてくる。

あたしが好きな本はもつといへ……物語のある話のものよ。

友情つて素敵！！

みたいな本。

：無いわね。

ああ、暇。

突然扉をたたく音。

トゥールかな？

扉を開けるとそこには透き通る青い髪の人。

「シーナ。」

「ゼン……お帰り！」

やっと帰ってきた！

「遅い。」

「は？たつたの10分だぞ？」

え？

時計は確かに事実を示していた。

「まあいい。ほら、おみあげ。」

差し出された一輪の白い花。

「見つけたらシーナに見せたくなって、戻ってきた。」

「ありがとう。」

手に渡された小さな花。

ふいにゼンの顔が近くなつた。

「わっ！－何？」

「何でもない。」

その瞬間頬に唇が落とされた。

「ばか。」

何が何でもないよ！

勢い良く扉を閉めて、赤い顔を隠しているあたしがいた。
手には一輪の花。

番外、え?……あ、あっがと!。(後書き)

短編の、「知も無きもの」「まぬうつかい」とつきも、よひしくお願いします(、')び
図々しいですね……すいません(*—*)

十一、あたしが？

あたしの想いがばれた直後、トゥールはあつさり、"じゃあ"と別れを告げて、あたし達をツタ姉様の元へ送った。

それにも、なんだかよく分かんない奴だった。

恋のキュー・ピットが趣味つて変だよ。

ツタ姉様は久しぶりに妹が自分の家に居ることに驚いて、何度か扉を開け閉めしてやつとあたしを認識した。

「なーるほどね。あんたがゼン。」

ツタ姉様は、いつも短い髪を頭の後ろ高くにまとめて赤い額当てをしている。

もちろん姉様はあたしが説明しなくてもゼンの存在を知っていた。姉様は父様さえも頼つてくる情報屋だ。

でも、確かに頼りになるけど変わってる。

姉様の部屋は、大ざっぱな性格を表すように汚い。

仕事で使つたらしい資料とか武器とか山積み。

「鱗は二二〇。」

小さな袋からぞうりつと鱗がこぼれた。

「いんなに？」

アコンス家が渡す鱗は一枚のはず…。

「家が未回収だったものとか、近所の迷惑な魔物とか、その辺からパクってきた。」

姉様…。

相変わらずやることが早い。

「わざわざ悪いな。」

ゼンが鱗をつかもうとする。

「あ、ゼンー！」

「触るなー！」

ゼンの手が威勢のいい音と共に弾かれた。

「何だよ？元は俺の物だ。」

「知ってるよ。でも集めたのはあたし。その文の代償はいただくわ。」

にかつと笑う顔は全く悪気のない気持ちが良くなつてくる。

「さすが、これこそ姉様…。」

「あら、ありがと。」

このわやかな笑顔。

「代償は何だ？」

でもゼンはそれに全く動搖していない。

「おもしろい情報はない？」

「具体的には？」

「まあ、個人的には噂話が好きだけど、政治の話は儲かるから助かるね。」

「噂ではこの国のプラー大臣は秘書とできているらしい。」

「何それ聞いたことないわ！！詳しく教えてくれる？？」

「プラー？」

あたし政治経済には興味ないからな。
ていうか、その情報は信用出来るの？
五百年眠つてたのに。

二人は話を盛り上がるだけ盛り上げた。
あたしにはさっぱりの話に大満足の姉様は、鱗をすんなり手放して、
新しい情報までくれた。
あとで姉様は泣くかもしれない。

「あたし、どうしても倒せなかつたんだけど、人型の魔物で確か名前は…。」

「ラーグラ。」

姉様の後ろに突如として現れた赤い髪。

「僕の事でしょう？」

かわいい笑顔で細めた赤い瞳。

「おまえは…」

飲み込もうとした鱗を手から「ますゼン」。

気構える姉様。

この前の人型だ。

でも…

「背のびた?」

前はもつと小さかった。

「やうだよ。僕は成長期を迎えて、魔力も右肩上がりだよ。」

相変わらずの笑顔だけど、成長を喜んでるみたい。

「だから戦う楽しさが分かつてきて…姉さんが遊んでくれて嬉しかったよ?」

姉様に向けられたその笑顔は挑発?

「おまえ鱗は?」

面倒くさそうに鱗を口に運ぶ。

「あげても良いけど遊んでよ?」

「ラークラ、ここで暴れないでよね。」

まあ、そつぱつのほもつともだけゞ…

「暴れた方が綺麗になるんじゃない?」

「あたしもそう思つわ。」

「ラクーラ、成長期をむかえて人の話を聞けるよつになつたのね。

「つるさこわね。」

「俺はおまえの遊びに付き合ひ氣は無い。」

ゼンが最後の一ツを飲み込む。

「竜に勝つて自慢したかつただけなのに。」

「俺は人間だ。呪いで竜にされた。」

「つえ。人間だったの? まづそつ…。じゃあいいや。」

ラークラは苦いものでも食べたような顔。
初めて見たよ。
笑顔以外の顔。

「仕方ない。帰る。」

ラーキラはあつと黙つて聞いてしまつた。

十一、あたしはヨルス姉様があんなに機敏に動くのを見た」とがない。

次に送られたのは、あたしが一番会いたくなかったヨルス姉様。何と言つてもこのマイペースがあたしの波長とイマイチ合わない。茶色い髪にイゴのように真っ直ぐな髪。

前髪も長くのばした後ろ髪も規則正しく並んでいる。この人がゼンと同じ年だなんて信じられない。

「シーナちゃん。」

とりあえずあたし達をテーブルに座らせて一言。

「あのね……」

「のこつも眠そうな顔もついていけない。

「何?」

「このままだとイゴちゃんが危険よ。」

「イゴが!?

私の片割れ!—

「どう危険なの?」

あたしはこなに焦つてゐるの、となりのゼンは落ち着いてゐる。まあ、ゼンには興味の無いことだらうけれど。

「覚醒出来ないかもしないわ。」

「覚醒なんて……」

しなくていい。

覚醒したらバーテバリーギに体を与えたも同然。

「覚醒しなかつたら人間を見る度におそりのよ？ゼンさんが落ち着いて話せないわよ？」

それじゃ、呪いが……

「構わない。シーナが傷つくよりましだ。」

あたしはゼンの過去かイコの未来かなんて決められない。

「そう？じやあ話は早いわね。あたしが借りた鱗を返すから、一人でイコを覚醒させなさい。」

ヨルス姉様は機敏に！
それはもう機敏に！！
ゼンに鱗を渡してあたし達に魔法をかけた。
イコの元へ。

十三、イユ!!

イユがいる。

目の前に。

合つのは八年ぶり。

イユがバテバリーギにとりつかれて以来隔離されて、合つことは許されなかつた。

イユのことを忘れたことはないけど…

「人間か。」

声も髪も仕草も、すべてがバテバリーギのもの。

ストレートの長かつた髪を乱雑に首の付け根で切り捨ててある。

目の前にいるのはイユじやない。

「死ね!!」

綺麗に育つたイユは、そのシユリス姉様にも似た綺麗な顔を歪めて、纖細な指をかざしてゼンを倒す為に魔法を使つ。

燃えたかる炎に降り注ぐ氷の刃。

「バテバリーギー目を覚ませ!!」

ゼンはただそれをよけるだけ。

「イユ!!…やめて!!

「無駄だ!!娘は私に支配されている!!」

イユは見えるし聞こえるし感じる」とも出来る。
でもバテバリーギとしか話せない。

バテバリーギはなんだかすゞく苦しそう。

「イユーーー」

あたしはどうすればいいの！？

「やめてーーー」

あたしと同じ黄金の瞳で、ゼンをにらむ。

「人間が……ゼンが何をしたって言つの？..」

イユの体が動きを止めた。

「……ゼ、ン……？」

「イユーーー？」

「シーナ、おまえ……光つて……」

「えー！何で？」

気がつけばあたしの指先から頭まで黄金の光を纏っていた。
無意識に魔法を使っていた。

「やめろーーー来るなー！」

イユの瞳が光を失った。

反対にあたしの体は光を増す。
あたしは段々意識が薄れしていく。

「イユ…。」

イユの瞳に明かりが灯った瞬間、あたしはこの八年聞いていなかつた声を聞いた。

「シーナちゃん…！」

十四、ええええっ…！？あたし？

イコー！

…声が出ない。

イコー！

…何で？

「イコー…」

出たー！

「ヒーの女が言つているが？」

あたしの意志を無視して言葉が次々と出る。

「おまえがイコか。」

あたしの田がイコを捉えた。

「…シーナちゃん？」

「シーナ。」

「お前は…ーー。」

あたしのゼンを見る田が陰しきなる。

”まさか…ゼンか？”

誰かの声…？

「イコよ、覚醒前の私が失礼した。」

田を見張るゼンに涙田のシーナ。
でもこの動きはあたしの意志じゃない。
もしかして…バテバリーギ…!
私が選ばれた?
なんで?

「あいつは私の若い頃の記憶しか持ち合わせていないからな。」

「何でシーナちゃんを選んだのよー?…シーナちゃんが…シーナちゃんが…」

イコ…。

「仕方ないことだ。イコの体が、覚醒前の私と竜との戦いに耐えられなかつたんだろ?」

そう。

もう一度と見たくなり。

「バテバリーギ…貴様一度も…」

ゼンはあたしから顔を背ける。

「お前には本当に申し訳ない」とした。

「それがシーナに取り付いて呑く言葉か?…」

あたしが今まで見たことない顔で…あのときよつも怒りに満ちた

顔で、あたしを見るゼン。

その瞳からは綺麗な涙がこぼれていた。

「ゼン。」

あたしの声が出た。

「なかなかやるなこの娘は。」

また違つ言葉、勝手に笑つ顔。

「貴様……」

「私はお前を呪いから解き放とう。忌々しき過去の過ちを許せとは言わない。だが私はこの為だけに、子孫を犠牲にして、自らの精神力を削り、存在を保っていた。」

あたしの頬を伝う涙。

”悔やんでも悔やみきれなかつた。どんな謝罪の言葉も足りない。バテバリーギ……”

「”今解き放とう。我が過ち、この魂と共に消し去らん……。”」

十五、さよなら……。忘れない。

「さひばだ。」

あたしの口から放たれた言葉を最後にバテバリーギの気配が消えた。

「シーナちゃん。」

それを悟つてか安心した表情を見せるイコ。

いつの間にか、ゼンの周りには無数の鱗が集まっていた。

鱗はゼンに向かつて貫く勢いで突き進み、溶けていった。

呪いの解けたゼンの髪は、茶色く染まって、ゼンの、人間の持つ本來の美しさを纏っている。

「シーナ。」

そんなことにはお構いなしであたしを呼ぶ声。

「ゼン。」

ゼンの腕に吸い込まれるように包まれて、これほど幸せなことは無いと感じた。

「シーナごめん。」

でもゼンは悲しみでいっぱいの表情だった。

「俺の、人間としての体は五百年も、保たなかつたみたいだ。」

ゼンがかざした指が、薄く透けてこる。

「ゼン……」

尋ねておいて、答えは聞きたく無かつた。
何となく分かっていたから。

「今まで竜だったおかげで俺は生きてこれた。竜の呪いが解けた今、
俺は……もつもたない。」

びんびん薄くなる影、かすれる声、苦しそうな笑顔。

「じゃあなシーナ。俺の「ひとせ……忘れる。」

切ない瞳が近づく。

「ゼン……」

唇を寄せた瞬間、ゼンの姿は消えた。

消えてしまった。

あたしに残ったのは、この気持ちと、ゼンが残した鱗だった。

あれから何年の時が過ぎただろう。

姉様達は相変わらずそれぞれ自由にしているみたいだし、イコは家に戻つて魔法の特訓に励んでいる。

あたしは、もう鱗を持ち歩かなくなつた。

あのゼンの残した鱗は、慰靈碑の中に眠つている。

アコンス家の先祖であるバテバリーギの過ちを残すために、父様がたてた碑。

今日もあたしは花を供える。

いつかゼンに貰つた花のよう、あたしの気持ちと共に渡す。
「忘れろ……なんて、最期の最期に嘘つかないでよね。」

あたしは絶対に忘れない。

また会えるその日まで。

十五、せぬづなり……。忘れない。（後書き）

最後までお付き合って下さった方も、飛ばし飛ばしで見下された方も、
有り難うございました。（^__^）三
未熟で読みずらいう文を、最後の最後まで読もうとして下さったあなた
の意志が、何よりありがたかったです（^__^）。）

余談ではありますが、私はこの話の中ではラーラークラがお気に入りです。

ちなみに「ませつかい」とつけ、では、ませつかいの、まほ
うつかい。

「名も無きもの」ではルートくん。

ついで、本当に心底どうでもいい話ですね（。。）

このままでお付き合いいただき、有り難うございました。

今はまた違うお話を考えています。

基本的に書きあげてから投稿するので、未完はありません。
ですから、気が向いたらまた、遊びに来て下さる（*^-^*）
有り難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5103c/>

竜の少年

2010年10月13日17時01分発行